

第2分科会

テーマ「自尊感情を高める道德の時間の在り方—9年間の道德教育の充実をめざして—」

提案者 江田島市立江田島中学校
司会者 江田島市立大柿中学校
記録者 江田島市立江田島中学校
指導助言者 呉市教育委員会

1 中学校区の概要と児童生徒の実態

江田島市は周囲を海に囲まれた自然豊かな地である。市内には小学校7校と中学校4校、県立高校及び特別支援学校がある。その内、江田島中学校区には江田島中学校と二つの小学校（江田島小学校、切串小学校）があり、児童生徒合わせて約500人が通学している。

本中学校区は、生徒指導規程をもとに毅然とした生徒指導を充実させることにより、暴力行為やいじめの件数は減少してきた。しかし、不登校生徒の人数の割合は江田島市内中学校における総数の75%（平成25年度）と高い状況であった。

図1は、平成26年度6月に実施した「ふるさと実感アンケート調査」における「自己肯定感」についてのアンケート結果である。

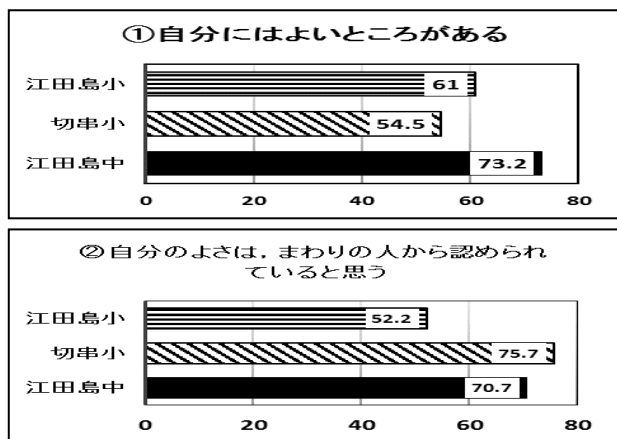


図1 「自己肯定感」についてのアンケート結果

(肯定的評価 %)

図1から、中学校に比べて小学校段階の自己肯定感が低い傾向にあることが分かった。また、他と関わる力や関わろうとする力が弱いため、人との関係の中で自己をとらえることができにくく、安心して生活を送ることができていない児童生徒がいるのではないかと考えた。これらのことから、本中学校区の児童生徒は自己肯定感が低く、自

尊感情や人間関係の育成等において課題があると考えた。

2 研究のねらい

中学校学習指導要領解説道德編（平成20年、以下「解説」とする。）には、自尊感情として自分への信頼感や自信などが挙げられており、「心理学辞典」によると、自尊感情は「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」と説明されている。これらのことから、自尊感情を育てるには、自己に対する肯定的な評価につながる多様な見方や価値観を育てることが大切であると考えた。

本中学校区は、平成26・27年度に市町の挑戦支援加配の指定を受け、豊かな人間性をはぐくむ道德教育推進加配を置き、道德教育推進を中心にした小中連携を行った。本中学校区では、自分の考えをはっきりと表現し、相手のことを思いやることができれば、自分を価値ある存在として認められるようになり、自尊感情を高めることができると考えた。そこで、9年間の道德教育を充実させ、他と関わる場を設けるなど、児童生徒相互の関わる力や関わろうとする力を育成する中で、多様な見方や価値観にふれ、自己肯定感を高めることにより、自尊感情を高められると考えた。

3 研究の内容

本中学校区におけるこれまでの道德の時間においては、中心発問や学習活動の工夫は行われていたが、児童生徒にとって受け身的な道德の時間になることもあり、魅力的な授業になっていなかったと考えている。また、それぞれの思いや考えを発表することはあるが、互いの思いや考えを聴き合い、伝え合うような授業になりえていなかった。

そこで、次のような取組をすることで、指導者自身の授業力向上及び道徳の時間の充実を図った。

(1) 発達段階を踏まえたねらいの設定

本中学校区では、めざす子ども像を実現するために、表1のように共通に取り組む内容項目を2-(1)「礼節」及び2-(2)「思いやり・親切」とした。さらに、学習指導要領を基にしながら、発達段階を踏まえたねらいを設定し、小・中9年間で育てたい姿を明確にした。

表1 共通内容項目と発達段階を踏まえたねらい

学年	内容項目「礼節」2-(1)のねらい
小1・2	気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接しようとする心情を育てる。
小3・4	礼儀の大切さを知り、だれに対してもあいさつをしようとする態度を育てる。
小5・6 中1	時と場をわきまえて、「りっぱなあいさつ」(大きく・はっきり・笑顔で)をしようとする態度を育てる。
中2・3	礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動、「心のこもったあいさつ」(おはよう+α〈ワンランク上のあいさつ〉)をしようとする意欲を育てる。

学年	内容項目「思いやり・親切」2-(2)のねらい
小1・2	幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる。
小3・4	相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする態度を育てる。
小5・6 中1	だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。
中2・3	他の人々に対し思いやりの心を持ち、相手の立場を考えながら自分にできることを進んで行おうとする態度を育てる。

2-(1)「礼節」に係る道徳の時間は1学期の早い時期に実施し、年間通して取り組む「挨拶の達人」や「小中合同挨拶運動」につなげられるようにした。また、2-(2)「思いやり・親切」に係る道徳の時間は各学期に一回以上行うことにした。中学校では、2-(2)「思いやり・親切」を各学年の重点項目に設定した。思いやりをもって接することの気持ちよさや他と関わることの楽しさを感じさせることで、自己肯定感を高め、「自尊感情」の育成を図った。

(2) 事前打ち合わせの活性化

広島県立教育センターにおける共同研究「学校

における授業研究の質的向上に関する研究」(平成26年度)の成果物として作成された「授業研究ハンドブック」には、授業研究を推進していくポイントが述べられている。

本中学校区では、これを参考にして道徳教育を推進するために、図2のようなPDCAサイクルを活用し、事前打ち合わせを活性化させた。



図2 事前打ち合わせ活性化のためのPDCAサイクル

さらに、事前打ち合わせを活性化させるためのポイントを以下の図のように整理した。

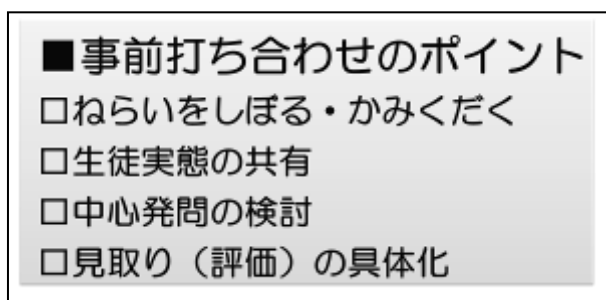


図3 事前打ち合わせを活性化させるためのポイント

取組当初の事前打ち合わせではT1・T2の役割の確認と授業の流れの確認で終わっていたが、ポイントに沿った事前打ち合わせをすることで、短時間で充実した打ち合わせができるようになった。

特に、「ねらいをしぼる・かみくだく」ことが重要であると考えており、その具体として、次のようなことに取り組んだ。

- ・内容項目について、「解説」に述べられている目標や内容を読む
- ・目標に含まれるキーワードを整理する
- ・児童生徒の実態を共有しながら、どこまでをねらうのかを検討し、ねらいをしぼる
- ・ねらいにせまっている子ども像を共有し、ねらいをかみくだく

このように児童生徒の実態を踏まえ、ねらいをしぼり、かみくだくことで、中心発問の改善につなげることができた。

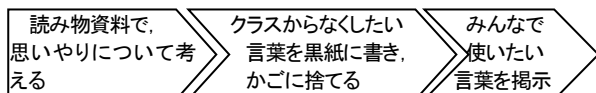
(3) 多様で効果的な指導方法の工夫

「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（平成26年10月21日）には、多様で効果的な指導方法の積極的な導入について、指導のねらいに即し、適切と考えられる場合には、道徳的習慣や道徳的行為に関する指導、問題解決的な学習や体験的な学習、役割演技やコミュニケーションに係る具体的な動作や所作の在り方等に関する学習などの指導を、発達の段階を踏まえつつ取り入れることも重要であると述べられている。

本中学校区では、これらの指導方法を積極的に取り入れることを確認した。多様な価値観や見方にふれさせ、物事を多面的・多角的に考えさせる場を設けることが、互いを認め合い、今ある人間関係の改善に役に立ち、児童生徒の自己肯定感を高めることができると考えた。

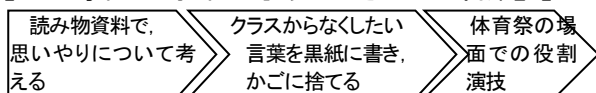
ア 役割演技やコミュニケーションに係る具体的な動作や所作の在り方等に関する学習の実際

【切串小 1学年 『ふわふわ言葉とチクチク言葉』】



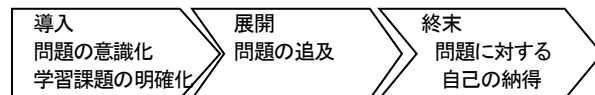
児童の反応
・きれいな言葉は気持ちがいい。ホンワカする。

【江田島中 1学年 『あふれさせたい言葉』】



生徒の反応
・失敗したときに「ドンマイ」「頑張れ」と言われるとうれしいし頑張ろうと思える。だから、誰かが失敗したときに悔しくても嫌なことは言わずに失敗した人が聞いて頑張れるような声かけをする。

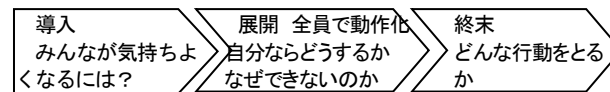
【江田島小 4学年 『少しだけなら』】



児童の反応
・がまんする気持ちを持って、時計を見て、約束した時間より早く終わるようにする。

ウ 体験的な学習の実際

【江田島中 1学年 『バスと赤ちゃん』】



生徒の反応
・心の中では「いいよ」と思っていたけど、言葉にするのは難しかった。
・こういう場面で拍手されたり反応されたりするとうれしいと思います。だから私も拍手したり「大丈夫？」と声をかけをしようと思いました。

(4) 道徳の時間と他の教育活動を有機的につなげる取組

小学校では、縦割り集団での活動や生活目標等の日常生活と関連づけ、生活目標を達成できた姿を掲示するなどして、児童自身にやればできることを実感させ、道徳の時間で学んだことを生活の場で意識させることができるような工夫をした。

中学校では、縦割り集団での行事の前後に道徳の時間を設定し、互いの価値を認め合えるような工夫をした。

また、教科指導（英語・理科）や部活動指導（陸上）、ボランティア活動（挨拶運動・地域清掃）など、小中合同の取組を年間に位置付け、道徳の時間との関連を図った。

(5) 成果と課題の共有化

授業後に「良かった点・課題点」及び「改善点」を整理し、図4・5のような報告書を挑戦加配担当者が作成した。ねらいにせまるためにはどのような発問構成が効果的だったのか、あるいは児童生徒の反応からねらいにせまれたかどうかを指標に基づき検証し、これらを共有することができた。

さらに、次年度の略案は改善点をもとに修正を加え、授業を実施した。このようなPDCAサイクルをくり返した。以上の取組から、児童生徒の思いや考えを引き出し、多様な価値観や見方にふれられるような授業づくりをめざした。

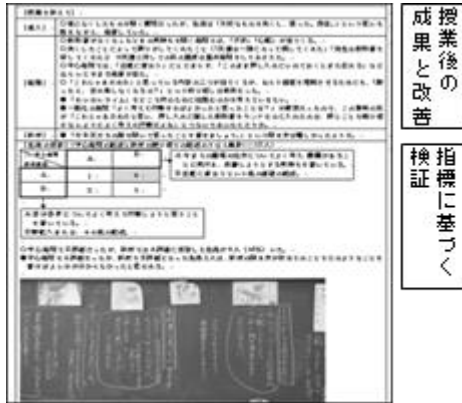


図4 授業後の報告書

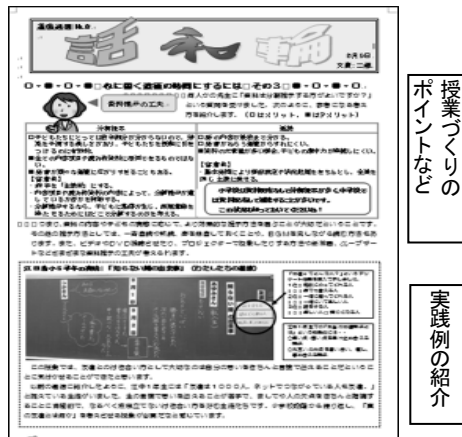


図5 道徳通信

4 研究の成果 (○) と課題 (●)

- 挑戦加配担当者が他校を兼職し、学級担任と指導案について事前打ち合わせをした上で、T・Tによる授業を進めることで、授業力の向上を図ることができた。
- 各小学校においては、自己肯定感に関する肯定的評価が、平成26年6月調査に比べ平成27年12月調査で上がった。これは、事前打ち合わせを活性化し、多様で効果的な道徳の時間の指導方法を積極的に取り入れることにより、道徳の時間の充実を図った成果だと思われる。
- 平成27年度からは、新たに不登校になった生徒がいない。9年間を見通した道徳教育の充実とのつながりについて、今後分析を進め、取組の改善につなげていきたい。

- 江田島中学校では、表2のように、最終の調査(12月)の数値が下がった。担任は、帰りの会等で、日々の行動に価値付けをするような説話をし、「挨拶のレベルが向上した」「クラス全体が思いやりを持ち、協力する雰囲気になってきた」「道徳の時間があった日の日記には肯定的な感想を書いている生徒が多い」など、生徒たちの道徳的価値に関わる成長を感じ取っている。しかし、生徒自身の道徳的実践につなげることは十分できなかった。

表2 「自己肯定感」についてのアンケート結果における肯定的評価の変容

	① 自分にはよいところがある			② 自分のよさは、まわりの人から認められていると思う		
	江田島小	切串小	江田島中	江田島小	切串小	江田島中
H26・6	61.0	54.5	73.2	52.2	75.7	70.7
H27・6	87.5	77.0	76.7	84.0	77.2	76.4
H27・12	89.0	91.7	76.3	90.0	90.3	75.3

(肯定的評価 %)

5 今後の改善方策

- 市町の挑戦支援加配の指定がなくても道徳教育推進教師を中心に、効果的な事前打ち合わせを継続できるように、2年間分の報告書を活用していく。
- 道徳の時間はもちろん教育活動全体で人と関わる力を育む学習活動を多く設定していく。例えば、役割演技やペアトーク、議論などを積極的に取り入れ、他との関わりの中で自分のよさを見つれたり、他から認められていることを実感したりする体験を意図的に仕組む。さらに、これらを次年度の年間指導計画に位置づける。
- 中堅学年であり、新生徒会の中心である中学校2学年に対する肯定的な評価を増やしていく。そのために、教師自身が他学年との比較や他の学級との比較だけをして評価するのではなく、学級の伸びや個人の伸びをしっかりと把握できるよう、肯定的評価のためのさまざまな視点を持つ。

授業後の成果と改善
指標に基づいて検証

授業づくりのポイントなど

実践例の紹介